追　悼　　井上和子先生
Obituary　　KAZUKO INOUE

井上和子先生を偲んで

影山太郎

井上和子先生が 2017 年 5 月 3 日に 98 歳で永眠されました。安らかなお眠りをお祈り申し上げます。

いま, 私の机の上に井上先生からご恵贈いただいた『生成文法と日本語研究―「文文法」と「談話」の接点―』(2009 年, 大修館書店) という著作がある。当時, 90 歳 (傘寿) を迎えられた井上先生が上梓された本書は, 拡大標準理論から統率・束縛理論, 極小プログラムという生成文法の軌跡をたどりつつ, 日本語統語論の研究において欠かすことのできない談話に係わる諸要素を情報構造に取り込むことを提唱したオリジナルな研究書である。出版時には, 井上先生の尽きることのない学問的探求心に対して, 国内の言語研究者のだれもが畏怖の念をもって驚嘆したものである。

井上和子先生は, 1919 年に大阪府でお生まれになり, ミシガン大学で言語学の博士号を取得されたのが 1964 年, その博士論文を *A Study of Japanese Syntax* として, 当時はオランダにあった Mouton 社から出版されたのが 1969 年 (年齢で言うと 50 歳) である。周知のように, Mouton 社は Noam Chomsky の *Syntactic Structures* を世界に送り出した出版社であり, 井上先生の学問はつねに Chomsky の学問に寄り添っていたとも言える。

井上先生のご研究は日本語統語論の理論的な分析を主眼としていたが, 生成文法そのものが英語を出自とする統語理論であることから, 日本英語学会でも活躍され, また, アメリカ言語学会では 1992 年に名誉会員 (honorary member) に推挙された。しかし, 学会への貢献としてはなんと言っても, 1983 年から 1984 年の 2 年間, 史上唯一人の女性会長として日本言語学会に大いなる新風を吹き込まれたことをあげなければならない。それまでの日本言語学会は格式が高く, 会議でも若手が発言しにくい雰囲気であったと聞いている。大会発表や機関誌への投稿も数はそれほど多くなかった。しかし, 英語学, 理論言語学の観点に立つ井上先生が会長に就任されると, さながら霧が晴れて一気に視界が開けたかのように, 学会の雰囲気もガラリと変わり, 非常にオープンな雰囲気になった。大会での研究発表の数も飛躍的に増加し, とりわけ, 井上会長が最初に担当された第 87 回大会 (1983 年 10 月, 神戸大学) では, それまでは数件から十数件に留まっていた大会発表の数が 20 件を超え, 会

場校の担当者が右往左往していた姿が思い出される。また，この大会は私自身にとって初めて日本言語学会で発表した大会でもあった。それまで日本言語学会というと，個別言語の記述的研究がほとんどで，雰囲気的にも敷居が高く敬遠していたが，井上先生が会長になられたことで発表意欲が沸いてきたというのが実感だった。

井上先生は，『言語研究』別冊「日本言語学会 50 年の歩み」（1988 年 12 月）に「日本言語学会の将来に向けて」と題する一文を寄稿され，ご自身が事務総長として 1982 年に東京都内の日本都市センターで開催された第 13 回国際言語学者会議（The XIIIth International Congress of Linguists）の様子を回顧されている。その中で先生は，アメリカ言語学会の夏期講座などの活動に言及され，日本言語学会が国内にも国外にも「開かれた」ものになることを実現可能な夢として述べられている。井上先生の夢は，その後，大会発表および『言語研究』投稿論文が飛躍的に増え，しかも参加する人たちが言語研究に係わる多岐の分野に拡大してきたことで，着実に実現されてきていると言える。

「日本言語学会 50 年の歩み」が出た翌年，私は小泉保会長から，当時移籍したばかりの関西学院大学で第 99 回大会を開催するよう依頼を受けた。そのころは，大会運営委員会という独立した委員会はなく，開催校は会場の手配のほかに，初日のシンポジウムの企画・運営まで責任を持たなければならないという厳しい状況だった。私は，困ったときの神頼みとばかり，井上和子先生にお願いして司会をお引き受けいただき，講師として柴谷方良先生（統語論），原口庄輔先生（音韻論），私（形態論）の 3 名を加えることで「日本語と言語理論」と題するシンポジウムを実現することができた。当日は 300 名以上収容の大教室に立ち見がでるほどの盛況だったことを思い出す。

井上先生について懐かしく思い出されることは，他にも少なくない。1987 年 5 月に 4 日間にわたって神戸市内で開かれた日本語統語論セミナー（後に論文集『日本語学の新展開』として刊行）では，井上先生のほか，服部四郎，藤村靖，久野暲，柴谷方良，チャールズ・フィルモアほか多くの著名な先生と議論を楽しむことができ，そのときのスナップ写真はかなり色褪せているものの，まだ残っている。また，1990 年前後の数年間は，井上先生の大型科研の研究にも参加させていただいた。しかし，私個人の研究史にとって重要な機会は，1970 年代後半に井上先生が提唱されていた理論（統語的な変形規則は不要で，意味解釈で説明できる）に反対する形で，「そうは言ってもやはり統語構造での変形は必要だ」という考えを提示できたことである（月刊『言語』1978 年）。

井上先生の提起された「統語規則と意味解釈の関係」や「文文法と談話構造の関係」といったインターフェイスに係るテーマは，おそらく永遠のものとして今後も探求されていくことだろう。井上先生は，そのような遠大な研究テーマを掘り下げるためのシーズを残してくださったのである。

（元会長／国立国語研究所所長）

井上和子先生を偲ぶ
――「笑顔」「夢」「信じること」――

長谷川信子

7 月 15 日に神田外語大学で「井上和子先生を偲ぶ会」を開催した。神田外大は，井上先生が，国際基督教大学，津田塾大学の後，68 歳で着任し，1990 年（71 歳）から 6 年半学長を務め，大学院の設置はじめ，開学したばかりの大学の礎を確固たるものにし，大型研究プロジェクトを牽引し，2001 年（81 歳）で名誉教授となられた後も研究所顧問，大学学術顧問として研究・教育に心を砕き，享年 98 歳でお亡くなりになるまで生涯現役を通された大学である。常人なら退職後の「余生」となる 30 年間を，こうした激務に身を置きながら，絶やすことのない「笑顔」で，常に「夢」を語り，夢だけでなく，先生と交わる人・学生の能力と可能性・将来を「信じ」，自然体で駆け抜けていかれた。私は，その神田外大での最後の 20 数年間ご一緒し，その「笑顔」「夢」「信じること」の力・魔法を経験し，目撃した。それは，具体的には言語学の研究や大学教育といった事柄と関わってのことだったが，その力はヒトの究極の goodness に通じるものなのである。

井上先生の「笑顔」についてのエピソードは，「偲ぶ会」に向けて寄せられた多くのメッセージにも頻繁に登場する。それは，「あたたかい」「慈悲深い」「柔和な」などの形容詞以上に，井上先生と接した者を，その時の存在以上に変えるという魔法の笑顔である。その笑顔に，安心し，励まされ，自信をもらい，次の飛躍・更なる先を目指す。そして気づけば，現在の自分がある。そういう笑顔だ。だから，井上先生のもとからは多くの学生が育ち，（「ミニ井上」「井上コピー」ではない）独立した研究者が巣立っていった。

私は，いわゆる「井上先生の教え子」ではない。先生が旺盛に活躍されていた 1970–80 年代にはアメリカにいたことから，その「笑顔」にはまだ出会っていなかった。「笑顔」より先に，『変形文法と日本語』などの著作に出会い，広範な知見と洞察，学者としての見識の深さに感銘を受け，また，女性研究者が少ない時代に，溌剌と颯爽と日本の言語学シーンを牽引していることを聞き，密かにロールモデルとして尊敬の念を抱いていた。先生の「笑顔」に出会ったのは，80 年代末に帰国してからである。

しかし，私に強烈な印象を与えたのは，その「笑顔」と共に語られる「夢」の方だった。その「夢」とは，文字化される目標ではなく，もっと大きく全てを包み込む究極の学び，知性が尊重される場を作る，といったものだ。誰もが，伸び伸びと，自分を信じて，教員・学生，先輩・後輩，研究分野の壁，大学の壁，国の壁を乗り越えて，高見を目指すことのできる学び，研究の環境を日本に作ること，それを，「言葉の不思議」「言語学」「言語学の将来の可能性」の観点から提供すること，それを

目指していたと思われる。それは，井上先生の学びの経験と重なる。

井上先生は 1957 年（いみじくも，Chomsky の *Syntactic Structures* が刊行された生成文法元年）に 38 歳で当時は構造言語学の中心地であったミシガン大学に留学したのだが，そこでは生成文法が学べないと知るや，何度となく MIT やハーバード大学を訪れ，生成文法の黎明期に共に学び支えた（故黒田成幸先生，久野暲先生を含む）多くの言語学を志す者と共に研究を進めることができた「幸せ」，それを許したアメリカの大学と研究の土壌を経験し，そうした「学びたいことを自由に学び，共に，知的興奮をシェアできる環境」，それを「日本で醸成する」との思いがあったに違いない。実は，私も，言語学の背景が皆無のまま渡米し，英語教育学の修士号から，言語学へと専門を変え，博士号を受けたワシントン大学だけでなく，カリフォルニア大学アーバイン校，マサチューセッツ大学アマースト校，MIT や南カリフォルニア大学，などで，ポスドク，助教授，客員研究員などとして，また，そうした大学に短期長期に滞在する多くの研究者との交流を通して「知識の探求者に開かれたアメリカの大学」の恩恵を受け成長させてもらった。井上先生の「夢」に共鳴し，「信じ」，共に追いかけてみようと思った。

井上先生は，その夢の具体化のひとつとして，すでに個別言語の壁を越えた「言語科学研究科」を神田外語大学に設置していたが，私は博士後期課程設置後の 1995 年に着任した。着任早々，当時の文部省の肝煎りの COE 形成基礎研究費獲得に向け「夢のような研究」の策定・応募に着手した。無事採択され 1997 年度から 5 年間，学内外 30 数名による言語理論の構築と神経言語学，心理言語学，言語処理による実証を掲げた壮大な研究課題に取り組んだ。日本人と外国人のポスドクを常時抱え，毎年，国内外から多くの研究者を招聘した研究会，国際ワークショップやシンポジウムを開催し，それと平行して研究課題の達成を具体化させるなど，それは，単純に「笑顔」の後押しだけでは済まされない苦労が伴うものであった。しかし，どんな難局でも特効薬はやはり，「笑顔」と「夢を信じること」であった。この間，大学院生として学んだ者，ポスドクとして籍を置いた者，プロジェクトに関わった者は，誰もがその環境を享受し，現在国内外で大きく活躍している。やはり，井上先生の「夢」は，着実に次世代へとつながっているのである。

井上先生の言語学者としての偉業，学会や大学教育への貢献は，その著作物，現在の学会，大学のあり方などから客観的にも見て取れる。私が深く関わったのは，井上先生の晩年（70 歳以降の 20 余年）だが，その年代の先生だからこそ先鋭化した「成長し続ける意思と環境がどこにでもあれば……，」という「夢」と「思い」に触れることができたように思う。その夢の具体化は容易ではない。しかし，その抽象性にこそ，それを理解する者がそれぞれのやり方で長く追求できる「力」「可能性」が秘められている。「夢」を信じ，交わる者を信じ，「笑顔」で，自然体で……。井上先生，その教えは現在形です。今後ともお導き，よろしくお願いいたします。

（神田外語大学言語科学研究科教授）

あの頃の井上先生

福井直樹

井上先生が亡くなった。高齢だったし，状態が最近あまり良くないということは聞いていたので，いつかその日が来ることはある程度覚悟していたが，喪失感はやはり大きい。井上先生とは長いお付き合いだったが，近くにいて一番親しく関わり合ったのは，やはり 1970 年代前半から 1980 年代にかけてだったと思う。以下，主にその時代に関する個人的な思い出を少しばかり書いて哀悼の意を表したいと思う。

「井上和子」の下で言語学を勉強しようと願って僕は国際基督教大学（ICU）に進学した。とは云っても，大学に入ってからすぐに教えを受けたわけではない。そもそも，僕が入学した年には井上先生は研究休暇でアメリカに行っていて ICU には居なかった。学部の 2 年目から井上先生の授業を履修することになったが，当時の不真面目な学生の 1 人だった僕は，授業にはあまり出なかったように思う。その頃，井上先生の周辺には生成文法に共感し，それを学ぼうとしている多くの大学院生や若手の大学教員が集まっていた。井上先生の助手をしていた原田かづ子さんあたりが年齢的には一番上で，その下に原田信一さん，山田洋さん，さらに数人，僕よりも 5 ～ 6 歳年上の大学院生たちが居て，この人たちとは勉強会をしたり，食事をしたり呑みにいったり，当時の学生・大学院生がよくやっていた行動をとりながら，しじゅう言語学の議論をしていた。主に彼らを通して，僕はだんだんと井上先生の人柄とか研究のやり方とかを――言語学に関する他の数多くの事柄とともに――学んでいったのである。こうして，いつのまにか井上先生を中心とする言語学コミュニティの中に入れてもらった感じになっていた。

学部の 3 ～ 4 年の頃だったと思うが，井上先生の大学院の授業でドラフトの形で回ってきたばかりの“On *wh*-movement”というチョムスキーの論文を読んでいた。僕はこの論文を一読して驚嘆し，これはすごい研究が出たものだと内心興奮していた。ところが，井上先生はこの論文に関しての批判的な意見をかなり長く授業で述べていた。普段，授業で発言など滅多にしないのだが，このときは思わず発言してしまった。この論文は，言語現象の背後にある特性を捉えるにあたって，抽象化による一般化がいかに有効であるかを示す画期的なものであるように思える，そこを評価しないで分析の細かい点を批判しても仕方がないのではないか，というようなことを云ったと思う。それに対して井上先生は「なるほどね。でも私は構造主義で訓練を受けているので，目に見えないものを安易に仮定したり，うまく行かない例を脇において進んだりするのがどうもだめなんですよ」というような答え方をした。井上先生に限らず，当時の日本でチョムスキーのこの論文はあまり評判が良くなかったように思う。詳細な事実の記述をないがしろにする空虚な研究と見なされ

ていたのではないだろうか。

その授業があった晩，上述の山田さんと原田信一さんと呑んでいた僕は，「井上先生は生成文法がわかっとらんのではないか。ポアンカレも云うように，科学がそして科学者が注目すべき事柄とは孤立した事実ではなくて，いくつかの事実を結びつけることによってその背後にある隠れた規則性を見つけることであり，そのためには抽象化が……」などとまくし立てた。そんな僕の長広舌を，鶏の手羽先をバクバクと食べ，ビールをジョッキでゴックンゴックンと飲み，タバコをスパスパッとせわしなくふかしながら（どの行為も彼の人生をそれほど長いものとしなかった遠因だと思う）聞いていた山田さんは，突き出た腹をさすりながら「ふんっ，まあそうだな。でもお前，井上先生でよかったな。そんなこと公言していたら，他の先生だったら破門だよ，破門！」と云い，ついで原田さんが「でもそんなのまだましなほうだよ。○○先生なんかもっとわかってないよ。この間なんか……」と井上先生をかばいたかったのか○○氏の悪口を言いたかったのかは判らないが，かなり手きびしい批判を長々と繰り広げた。

僕が井上先生の比較的近くにいた 70 年代の数年間を思い出すとき，いつも浮かんでくるのはこういった情景である。つまり，情熱とエネルギーを持てあましていつも生意気に減らず口をたたきながらウロウロしている，でも言語学が大好きな若者たちの真ん中で「なるほどね」とか「○○くん，それはちょっとちがうわ」などと云いながらニコニコと井上先生が笑っている，そういう心象風景である。言語学が好きで寄ってくる若者を分け隔てなく井上先生は受け容れ，周囲にいる我々も言語学のことだけを考えて行動していた。言いたいことを云ってはいたが，僕が知るかぎり，井上先生に敬愛の気持ちを抱いていない若者は――自分自身も含め――誰ひとりとしていなかった。我々はみな，井上先生が作り出した大きな知的空間の中に放し飼いになっている状態だった。生成文法もまだ発展途上という雰囲気が色濃く残っていたし，新しい科学運動を言語研究に起こすのだという熱意を多くの人たちが持っていた時期だった。井上先生もまだ 50 代だったし，若い研究者との関わりも学問的には真剣勝負の趣があった。しかしどんなに真剣に激しく学問的議論を戦わしても，それによって我々と井上先生との関係に悪い影響が出るというようなことは全くなかった。上で述べた会話がなされた 1 ～ 2 年後に，原田さんは「日本語に『変形』は必要だ」という論文を書いて，日本語に変形（文法的変換）は必要ないのではないかという主張をした井上先生に真っ向から反論した。そのときも，「私はトランスフォーメーションなしでやれるんじゃないかと思うんだけどねえ。原田くんは違うって云うのよ」と嬉しそうに話していた井上先生の姿をはっきりと覚えている。

それから間もなく，原田さんは悲劇的な亡くなりかたをした。ICU で執り行なわれた葬儀で，弔辞を読みながら途中でたまらず泣き崩れ，それでも必死に最後まで続けようとしている井上先生の姿を僕は呆然として見ていた。人の死に出会うたびにいつも感じる一種の悔しさ，暗い憤りのようなものが心の中を占めていて，身

動きが取れなかったのである。何年かして僕はアメリカに渡り，その後ずっとアメリカで研究活動を行なうことになる。その間に山田さんも若くして急逝した。時は遷り，今世紀に入って黒田成幸さんがカリフォルニアの地に没し，今年になってからは，藤村靖さんがハワイで亡くなり，今またこうして井上先生が亡くなって，あの当時よく話をしたり話に出てきたりした人たちがほとんど全ていなくなってみると，70 年代に僕が井上先生の周囲にいて経験したあの知的雰囲気は，もしかしたらそれに先行する 60 年代に作られたものの残響に過ぎなかったのかも知れないという思いがしてくる。

70 年代になって，60 年代にあった変革への熱気は急速に日本の社会から失われていく。その少し後を追うようにして，生成文法に対する熱気も，日本では，ゆっくりとではあるが冷めていったような気がする。70 年代中期から 80 年にかけて僕がそのさなかに身を置いていたあの動きは，おそらく 60 年代の熱気がゆっくりと冷めていく過程であったのだろう。原田信一さんの死はその象徴的な出来事であったのだと思う。こういった 60 年代から 70 年代の動きの全てにおいて，（決して若者といえる年齢・地位ではなかったにもかかわらず）井上先生は常に若者の側に立ち，極めてリベラルな雰囲気の研究コミュニティを作り出すことによって，生成文法を中心とする新しい言語研究を日本で発展させることに力を尽くしたのである。

その後，80 年代初頭から現在に到る何十年かの時代の動きのなかで，井上先生は数々の難局をすさまじいエネルギーと無類の楽天性で乗り越え，挫けることなく前進を続けた。その背後には 60 ～ 70 年代の「あの頃の学問環境を再現しようという願いがいつも心の底にあった」（井上「原田信一さんのこと」，2000 年）のだという。そんな時代があったことさえほとんどの人が忘れてしまっているこの社会において，驚嘆すべき持続力である。この持続力が，井上先生の研究，教育，行政を含む社会的活動の全てを強靱に支えていたのだと思う。

井上先生を評して，ときおり，「慈母のような」という表現が用いられることがある。確かにそういう側面があったことは事実だが，むろん，それだけではなかった。80 年代に入ってからのことであるが，井上先生が「あの人はあちこち出かけてばかりいるけど，まともな研究をきちんとやっていない」と言って，ある生成文法研究者を切って捨てるのを聞いて驚いたことがある。こちらがびっくりしているのを見て,「私はね, 意外とこういうことが判るんですよ」と笑いながら云っていた。井上先生の「慈しみ」の背後には，厳正な学問的評価・判断が伏在していた。やさしいだけの先生では決してなかった。

ときおり，井上先生の下で言語学を勉強していなかったら自分の人生はどうなっていただろうと考えることがある。もちろんはっきりした答えなど出るはずもないが，何となくぼんやりと云えるのは，井上先生がいなかったら，僕はおそらく日本で言語学の勉強を続けてはいなかっただろうな，ということである。学部を出てすぐにアメリカに行ったかも知れないし，もう少しあり得る可能性として，学部でもう勉強をやめてしまっていたかも知れない。いずれにしろ，今までの人生とは全く

別の人生を送っていただろう。つまり，今の自分の在り方そのものが井上先生に負っているわけで，僕のような人間まで無条件に包み込んでくれた井上先生に今さらながら，とても返しきれなかった，報いることもできなかった，人間としての恩誼を感じている。色々な意味で強くて大きな人だったと思う。

（上智大学大学院言語科学研究科教授）

井上和子先生を偲んで

上田由紀子

井上和子先生は，国際基督教大学，津田塾大学を経て，古稀を目前にした 1988 年，神田外語大学にご着任くださった。私が学部の 2 年生の時であった。

井上先生は，その時，すでに，新しい言語学，生成文法理論を日本に根付かせ，前任の 2 大学で，数多くの優秀な研究者を世界に輩出されていた。その後の人生は，どんな選択肢も用意されていたと思う。そのような中で，井上先生が選択なさったのは，開学間もない，小さな私立大学に言語学を中心とした新しい大学院を立ち上げることであった。先生のこのご決断により，私は，先生と出会う幸運に恵まれ，先生が天に召されるその時まで，29 年に渡り，ご指導いただくこととなった。

着任後，井上先生は自ら，授業を通して，読書会を通して，私たち学生に，言語学という学問の種をまき，忍耐強く育てて下さった。（ちなみに，井上先生は，補講期間も授業なさるのが常であった。補講は，休講を補うものではなく，授業内容をさらに補う時間であった。）一期生の私たちには，先輩となる院生はおろか，学部の上級生もいなかったため，その役目の全てを井上先生ご自身が担って下さった。毎週火曜日の 5 時から大学が閉まるまでの数時間が先生との読書会の時間であった。授業のない，休みの期間は，時間をたっぷりとって下さった。Noam Chomsky 氏の一連の論文や著書もこの読書会で先生と読んだ。先生との日々中で，いつしか私は，大学院へ行って，言語学を専攻したいと思うようになった。

井上先生は，新しい大学に言語学の礎を築いて下さったばかりでなく，夢を現実へと変えていく過程を私たちに示して下さった。大学院の設立，COE の採択，夢は，私たちの目の前で，現実となった。この期間に得た，学びと経験と出会いの 1 つ 1 つが，現在の私の糧となっていることを強く感じる。

井上先生は，召天されるその時まで，研究者そして教育者であり続け，生涯現役を貫かれた。前述した読書会は，その後，通称「井上ゼミ」と名前を変え，2001 年に先生が大学院をご退任なさった後も，2015 年の夏まで続けられた。井上ゼミの最大の特徴は，生成文法に携わる者だけでなく，国語学，日本語学，日本語教育など多岐にわたる分野の院生や修了生が自由に集い，発言できる空間であったこと

だ。井上先生はどの分野の発表にも，真摯に耳を傾け，するどい質問をなさった。そして，ご自身も私たちに混じって研究発表をなさった。

大腿骨を骨折され，数ヶ月の入院を余儀なくされることもあったが，リハビリを経て，見事に復活され，それまで同様に，朝から昼を挟んで夕方までの 5 ～ 6 時間，大学のある幕張の地でゼミを定期的に開いて下さった。骨折後，ご自宅の外では車椅子を使われるようになっていたので，ゼミの開催地を大学からもっと先生のご自宅の近くに移してはどうかとご相談したことがあったが，先生は，「大学」で開催することを強く望まれた。

お一人で外出することが難しくなってからも，先生の研究への情熱は途絶えることはなかった。先生は，ご自身の研究人生の集大成とも言えるご著書『生成文法と日本語研究―「文文法」と「談話」の接点』（大修館書店）をすでに出版されていたが，召天されるその時まで，次の本の原稿のことを気にされていた。私たちが先生のご自宅を訪れると先生は次の本の構想をいつもの満面の笑みで話されていた。次の本は，一般の人にも，言語学の面白さ，ことばの世界の奥深さを分かってもらえるような「ことばのしくみ」についての本なのだと言って，執筆中の原稿を見せて下さった。まだまだ手を入れるおつもりだったにちがいない。リハビリ入院中もその原稿を持って来て欲しいとご家族に頼んで，傍らに置いていらしたと聞いている。

先生との 29 年間，先生の後ろ向きな言動を，私は見たことがない。先生は，困難も常にポジティブな方向に一瞬で捉え直し，新たな一歩を踏み出す原動力に変えてしまうのだった。私は，井上先生の一言で，その場の空気が一変する瞬間を幾度か経験している。私たちが何かに囚われ，前に進めなくなっている時，その囚われを一刀両断され，私たちは，その瞬間に，はっと我に返って，今，成すべき事を行う強さを得ることができた。情けないと自分を恥じる時間やエネルギーがあるのなら，前を向いてどんな一歩でも踏み出さなければならないと思わされた。

先生の飽くなき探究心と言語学への情熱は，天に召されてからも途絶えることはないように思う。今すでに，「（天の）言語学会」で，先に逝かれた先生方と大いに議論を楽しまれているにちがいない。そして，私たちのことも，今までと変わらず，見守り続けて下さっていると思う。先生に，再び，「なるほど。これはなかなか面白いね。」と言っていただけるように，前を向いて進んでいきたい。

先生の棺の中には，2017 年 4 月 1 日付の神田外語大学学術顧問の辞令が共に納められていた。まさに，公私に渡り生涯現役を貫かれた証であった。

井上先生への感謝のことばでこの追悼の原稿を終わりたい。

井上和子先生，29 年間，どうもありがとうございました。そしてこれからも，天の高いところから私たちを見守っていて下さい。宜しくお願い申し上げます。

（山口大学人文学部人文科学研究科教授）

略年譜

1919 年　4 月 17 日　大阪府に生まれる
1939 年　津田英学塾（現津田塾大学）卒業
1951 年　カリフォルニア州ミルズ・カレッジ留学（1952 年まで）
1957 年　ミシガン大学大学院留学
1958 年　ミシガン大学大学院より修士号（英語学）取得
1960 年　ミシガン大学大学院（博士課程言語学）留学（1961 年まで）
1963 年　国際基督教大学講師
1964 年　ミシガン大学大学院より言語学博士号（Ph. D. in Linguistics）取得
1965 年　国際基督教大学助教授
1967 年　国際基督教大学準教授
1971 年　国際基督教大学教授
1973 年　マサチューセッツ工科大学研究員（1974 年まで）
1976 年　ハーバード大学及びマサチューセッツ工科大学研究員
1985 年　津田塾大学教授
1986 年　津田塾大学大学院文学研究科委員長・津田塾大学文化言語研究所長
1988 年　神田外語大学教授（1997 年まで）
　　神田外語大学言語教育研究所長（1991 年まで）
1990 年　神田外語大学学長，学校法人佐野学園理事（1997 年まで）
1992 年　神田外語大学大学院研究科長（1997 年まで）
1997 年　神田外語大学大学院教授（COE 担当 2001 年まで）
2001 年　神田外語大学退任（3 月）
2001 年　神田外語大学言語科学研究センター顧問（2012 年まで）
2001 年　神田外語大学名誉教授
2012 年　神田外語大学学術顧問（2017 年没まで）
2017 年　5 月 3 日　98 歳にてご逝去

【役職】
文部省学術審議会専門委員（科学研究費分科），文部省学術審議会委員，日本ユネスコ国内委員会委員，文部省大学審議会委員，国際日本文化研究センター評議員，文部省国語審議会委員，学位授与機構評議員，文化功労者選考審査会委員，学術用語分科会会長，日本学術会議会員など多数歴任

【学会等】
日本言語学会会長（1983–85），日本英語学会理事（1983–90），日本英語学会副会長（1988–90）はじめ，大学英語教育学会評議員，言語学者常置国際委員会副会長，財

団法人国際学友会理事，日本語教育能力検定試験実施委員会委員，同委員長など

【受賞】

ユネスコ活動功労者表彰（1995 年 11 月）
勲三等宝冠章（1996 年 春）
日本英語学会特別賞（2007 年 11 月）

井上和子先生主要著作目録

藤巻一真　作成

【著書】

1969　*A Study of Japanese Syntax*. Mouton.
1976　『変形文法と日本語・上―統語構造を中心に』大修館書店.
1976　『変形文法と日本語・下―意味解釈を中心に』大修館書店.
1978　『日本語の文法規則―日英対照』大修館書店.
1983　『講座　現代の言語 1　日本語の基本構造』［編著］，三省堂.
1985　『現代の英文法　第 6 巻　名詞』［山田洋，河野武，成田一との共著］，研究社.
1987　『新英語学辞典』［共編］，研究社.
1989　『日本文法小事典』［編著］，大修館書店.
1999　『生成言語学入門』［原田かづ子，阿部泰明との共著］，大修館書店.
2009　『生成文法と日本語研究―「文文法」と「談話」の接点』大修館書店.

【論文】

1966　「チョムスキーの言語理論と日本語の文法」『ことばの宇宙』1，ラボ教育センター.
1967　連載「変形文法入門」『英語教育』16，大修館書店.
1970　Case from a new point of view. In: Roman Jacobson and Shigeo Kawamoto (eds.) *Studies in General and Oriental Linguistics: Presented to Shiro Hattori on the Occasion of His Sixtieth Birthday*. TEC.
1971–73　連載「変形文法と日本語」『英語教育』20–22，大修館書店.
1972　The role of the 'Case' in a generative grammar. *Studies in Descriptive and Applied Linguistics* 5, 国際基督教大学.
1973　Self-controllability and self-changeability. *Studies in Descriptive and Applied Linguistics* 6, 国際基督教大学.
1972　*Agent* and *source* in Japanese. *Papers in Japanese Linguistics* 1, University of California,

Berkeley, Japanese Linguistic Workshop.
1975 「構造と生成」『国語学』101.
1976 Reflexivization: An interpretive approach. In: Masayoshi Shibatani (ed.) *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar.* Academic Press.
1976–77 連載「日本語に変形は必要か」『月刊言語』5, 6, 大修館書店.
1978 'Tough' sentences in Japanese. In: John Hinds and Irwin Howard (eds.) *Problems in Japanese Syntax and Semantics.* 開拓社.
1982 Transformational vs. lexical analysis of Japanese complex predicates. *Linguistics in the Morning Calm.* The Linguistic Society of Korea, Hanshin Publishing Company.
1982 An interface of syntax, semantics, and discourse structures. *Lingua* 57.
1983 「文―文法と談話文法の接点」『言語研究』84.
1983 A lexicalist grammar of Japanese. 井上和子・小林栄智・リチャード リンディ（編）『現代言語学論叢―村木正武教授還暦記念論文集』三修社.
1984 Case marking and property reading. *Proceedings of the Nitobe-Ohira memorial conference on Japanese studies*. The Asian Center, the University of British Columbia.
1985 Argument structures of complex predicates of Japanese. 科学研究費補助金特別推進研究（1）研究報告（1）『日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究』津田塾大学.
1989 「主語の主題役割と格配列」, 久野暲・柴谷方良（編）『日本語学の新展開』くろしお出版.
1990 On nonagentive intransitives: English-Japanese comparative syntax. In: Matsuo Soga (ed.) *Papers from Middlebury Conference on Japanese Linguistics and Japanese Language Teaching*. Middlebury College.
1992 On middles. 科学研究補助金（総合研究（A））研究成果報告書『言語理論と日本語教育の相互活性化』神田外語大学.
1995 「他動詞文と自動詞文の対応」, 須賀一好・早津恵美子（編）『動詞の自他』ひつじ書房.
1997 Reanalysis of the Japanese case particle *ni*. In: Masatomo Ukaji et al. *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*. 大修館書店.
1998 Sentences without nominative subjects in Japanese. COE 形成基礎研究費　研究報告『先端的言語理論の構築とその多角的実証（2-A）』神田外語大学.
1998 On the Japanese particle *o*. In: Mark Janse (ed.) *Productivity and Creativity: Studies in General and Descriptive Linguistics in Honor of E. M. Uhlenbeck*. Mouton.
2004 Conceptual and methodological bases of the Minimalist Program (Review article of *On Nature and Language* by Noam Chomsky). *English Linguistics* 21.
2005 Case (with special reference to Japanese). In: Martin Everaert and Henk van Riemsdijk (eds.) *The Blackwell Companion to Syntax 1*. Blackwell.

2007 「日本語のモーダルの特徴再考」，長谷川信子（編）『日本語の主文現象―統語構造とモダリティ』ひつじ書房.
2011 「モーダルをめぐって」，長谷川信子（編）『70 年代生成文法再認識―日本語研究の地平―』開拓社.
2012 「独立文の条件再考」*Scientific Approaches to Language* 11. 言語科学研究センター，神田外語大学.

【翻訳】

1969 エモン・バック『変形文法』大修館書店.
1979 ノーム・チョムスキー『言語論―人間科学的省察』［神尾昭雄，西山佑司との共訳］，大修館書店.
1981 エモン・バック『文法の理論』［原田かづ子との共訳］，大修館書店.
1984 ノーム・チョムスキー『ことばと認識―文法からみた人間知性』［神尾昭雄，西山佑司との共訳］，大修館書店.
1987 フィリップ・M・スミス『言語・性・社会』［河野武，正宗美根子との共訳］，大修館書店.